

令和 3 年 6 月 7 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12409

研究課題名(和文)自然言語における一致の普遍性と統語構造の通時的変化に関する日英語対照研究

研究課題名(英文)A Comparative Study of the Universality of Agreement and Syntactic Changes in English and Japanese

研究代表者

三上 傑 (MIKAMI, Suguru)

東北大学・高度教養教育・学生支援機構・講師

研究者番号：60706795

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、自然言語における一致(Agreement)の普遍性に関して、理論的・実証的研究を実施した。具体的には、Miyagawa(2010, 2017)により提唱されたStrong Uniformityと素性継承システムのパラメータ化の理論的枠組みを一部修正し、二つのタイプの焦点卓越言語を含む自然言語の新分類を提案した。そして、現代英語と現代日本語間の統語構造の共時的変異、さらにはそれらの通時的変化に共通する普遍的なメカニズムを明らかにし、統一的な説明を与えた。また、焦点卓越言語におけるPhi素性一致に語用論的要素が関与するメカニズムについても、その詳細を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、その作業過程において、これまで生成文法理論研究であまり論じられることのなかった敬体表現を分析対象として取り上げた。これにより、生成文法理論での理論構築に伝統的な日本語学で得られた多くの知見が組み込まれることとなり、両研究分野の知見の融合が図られた。また、本研究では、現代英語と現代日本語間の共時的変異に加えて、全く異なる言語タイプに分類されるそれらの言語の変化過程をも同一視座で捉えることを試みた。これらの試みは本研究の独創的な点であり、その分析可能性を多角的に立証できたという点で、本分析の学術的意義は大きいと考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the universal nature of agreement in natural languages. More specifically, revising the strong uniformity and the parameterization of feature inheritance advocated by Miyagawa(2010, 2017), it proposed a new classification of natural languages, including a Subject-prominent language and two types of Focus-prominent language. It also demonstrated that the proposed classification succeeds in giving a unified explanation for both the synchronic variation among contemporary languages and the diachronic change of English and Japanese syntax. Furthermore, it clarified the mechanism for how pragmatic factors are associated with the Phi-feature agreement in Focus-prominent languages and analyzed Japanese honorification as a case of the Phi-feature agreement in the CP domain.

研究分野：英語学

キーワード：Strong Uniformity 素性継承システムのパラメータ化 文法的一致 通時の研究 共時の研究

1. 研究開始当初の背景

自然言語はすべての言語に共通する原理と言語間で変異するパラメータから成るという原理とパラメータ・アプローチが Chomsky (1981)により提案されて以来、生成文法理論では比較統語論研究が盛んに行われ、これまでに理論的・経験的に重要な多くの貢献がもたらされてきた。その中でもとりわけ活発な議論がなされてきたものに、一致パラメータがある。性・数・人称に基づく形態的具現が豊かな印欧諸語に比べて、日本語ではそのような現象が一見したところ観察されない。そのため、日本語統語論研究においては、日本語も英語と同様に文法的な一致が行われるとする立場に加えて、英語とは異なり一致が存在しないとする立場の両方が提案され、それぞれの理論的立場から研究が進められてきた。このように、すべての自然言語に一致 (Agreement) が普遍的に存在するのかどうかという問いについては、理論的・経験的にも、その決着を見ていないと言える。

また、原理とパラメータ・アプローチの見方に従えば、同一言語における史的变化も、そのパラメータ値の変化に伴う言語タイプの変化として捉えられ、現代語を対象とする共時的研究との間で、統一的な観点から比較・対照研究を行うことが可能になる。しかしながら、これまで提案されてきたパラメータの多くは、その妥当性が共時的観点か通時的観点のいずれかによってのみ立証されてきており、両観点から十分な検証がなされ、互いの知見が融合した形の統語システムの解明には至っていない現状にある。

2. 研究の目的

本研究では、これらの学術的背景を踏まえ、自然言語における一致の普遍性をめぐる学術的問いに対して、Miyagawa (2010, 2017)により提唱されている Strong Uniformity と素性継承システムのパラメータ化の観点から再検討し、その理論的・経験的意味合いを明らかにすることを目的とした。具体的には、当該理論的枠組みの下、現代英語と現代日本語間の共時的変異、さらにはそれらの通時的変化に対しても統一的な説明を与えることで、共時的・通時的両面から十分な検証がなされた言語理論を構築することを目指した。また、理論構築に伝統的な日本語学で得られた多くの知見を積極的に組み込むことで、両研究分野の知見の融合を図ることを試みた。

3. 研究の方法

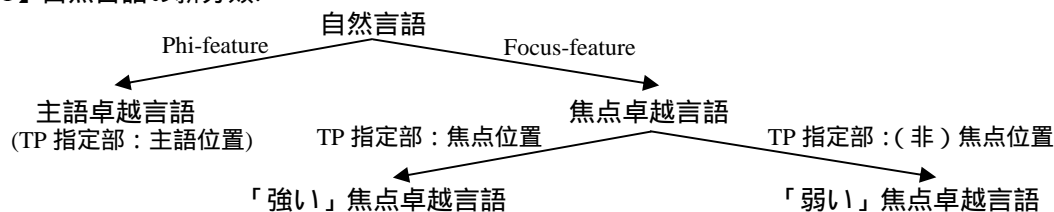
本研究では、研究を着実に遂行するために、1)当該理論的枠組みの精緻化、2)英語と日本語における統語構造の通時的変化に関する考察、3)焦点卓越言語における Phi 素性一致現象の特異性に関する考察、4)さらなる理論的・経験的意味合いの考察という四段階に分けて実施した。それぞれの詳細については以下のとおりである。

1) 当該理論的枠組みの精緻化

本研究では、自然言語における一致の普遍性を捉えるにあたり、Miyagawa (2010, 2017)で提示された主語卓越言語と焦点卓越言語から成る自然言語の二分類と、焦点卓越言語における語用論的要素が統語操作へ関与し得るメカニズムについて、理論の精緻化を行った。

具体的に、前者については、主語卓越言語と焦点卓越言語という二分類を保持した上で、焦点卓越言語をさらに二分類した自然言語の新分類を提案した。

【図1】自然言語の新分類:



Miyagawa (2010)で当初提案された言語分類に基づく、TP 指定部が常に主語位置として機能する主語卓越言語に対して、焦点卓越言語では常に焦点位置として機能することになる。しかしながら、焦点卓越言語に分類される現代日本語を見てみると、実際には TP 指定部が必ずしも焦点位置として機能せず、非焦点要素によって占められている場合が確認される。本研究では、この理論と現実の乖離に着目し、より整合性のある言語理論にするためには、焦点卓越言語をさらに二分類する必要があると着想するに至った。そして、TP 指定部が常に焦点位置として機能する、従来タイプの焦点卓越言語(「強い」焦点卓越言語として再分類)に加えて、TP 指定部が非焦点要素によって占められるのを許容する「弱い」焦点卓越言語を新たに提案した。

また、統語操作への語用論的要素が関与するメカニズムについて、Miyagawa (2010)の理論的枠組みに基づく、焦点卓越言語では Phi 素性がフェイズ主要部である C に留まり続けることから、Phi 素性一致が CP 領域内で適用されることになる。ここで、Rizzi (1997)が主張するように、CP 領域が統語と談話をつなぐインターフェイスであると考え、Phi 素性一致に語用論

的要素が関与する可能性が示唆されることになる。本研究ではそのメカニズムについてさらなる詳細を検討した。具体的には、Miyagawa (2017)に従い、話し手や聞き手が頂として選択される Speech Act Structure (cf. Ross (1970))が、CP 領域の上位に生起する統語構造を導入した。この構造に基づくと、焦点卓越言語では Phi 素性を担っている C 主要部が Speech Act Structure の主要部である SA 主要部と同一フェイズに位置することになる。その結果、当該言語タイプでは両者の連動が可能になり、Phi 素性一致に話し手と聞き手の関係性といった語用論的要素の関与が許容されることになる。

2) 英語と日本語における統語構造の通時的変化に関する考察

本研究で提案した主語卓越言語と二つのタイプの焦点卓越言語で構成される自然言語の新分類(【図1】)の妥当性について、英語と日本語における統語構造の通時的変化を捉えることで立証を試みた。

日本語における統語構造の通時的変化については、TP 指定部が非焦点要素によって占められることを許容する現代日本語の特性に基づき、「弱い」焦点卓越言語として分類し直すことを試みた。また、上代日本語については、当該時期に観察されていた「係り結び」現象における語順制約と焦点マーカーとして機能した助詞「を」が示した語順制約の存在に着目した。これらの語順制約は平安期以降に消失したとされるが、本研究では上代日本語における語順制約が、TP 指定部が常に焦点要素によって占められることを強制する「強い」焦点卓越言語の特性によるものであり、平安期以降、パラメータの値が現在の「弱い」焦点卓越型に変化したことに伴い語順制約が消失したとする仮説を設定し、検証作業を行った。

一方、英語における統語構造の通時的変化については、前回の研究課題において、後期中英語期に焦点卓越言語から主語卓越言語へパラメータ変化したことを明らかにしていたが、本研究ではそのパラメータ変化以前の古英語と初期中英語に注目した。そして、英語における There 構文の段階的発達に関する史的事実に基づき、後期古英語期に「強い」焦点卓越型から「弱い」焦点卓越型にパラメータ変化を起こしたという仮説を設定し、検証した。

3) 焦点卓越言語における Phi 素性一致現象の特異性に関する考察

本研究で提案した焦点卓越言語における Phi 素性一致に語用論的要素が関与するメカニズムの妥当性について、検証作業を行った。具体的な分析対象としては、日本語における主語尊敬語化現象を取り上げた。この現象は Phi 素性一致現象の特性を示す一方で、話し手と聞き手の関係性やポライトネスが深く関わっており、一致現象として分析するかどうかについては活発な議論がなされてきた。本研究では、Speech Act Structure が CP 領域の上位に生起する統語構造に基づき、当該現象が焦点卓越言語タイプの Phi 素性一致現象として分析される妥当性について検証を行った。なお、検証作業にあたっては、これまで生成文法理論ではあまり議論されることのなかった日本語学の知見も積極的に取り込み、両研究分野の知見の融合を図った。

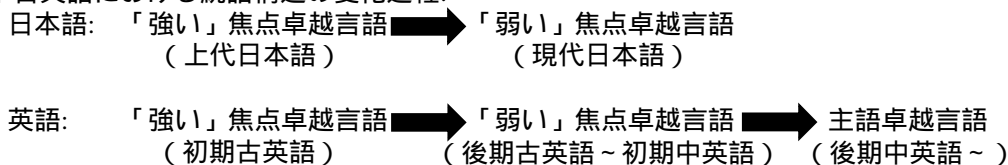
4. 研究成果

本研究による主な研究成果は、以下の三点にまとめられる。

1) 英語と日本語における統語構造の通時的変化過程に関する共通性

本研究では、提案した自然言語の新分類(【図1】)の妥当性を立証するにあたり、英語と日本語における統語構造の通時的変化を捉えることを試みた。その結果、現代英語と現代日本語はそれぞれ主語卓越言語と「弱い」焦点卓越言語という異なる言語タイプに分類されるものの、両言語の変化過程に関しては、「強い」焦点卓越型から「弱い」焦点卓越型、さらには主語卓越型へと一定の方向でパラメータの値が変化していることが明らかになった。

【図2】日英語における統語構造の変化過程:



このことから、焦点卓越型から主語卓越型へという言語変化の方向性が、自然言語に共通して観察されるかなり普遍性の高いものである可能性が示されることとなった。

この統語構造の変化過程における共通性が持つ理論的・経験的意味合いについては、今後、多くの言語を対象とした比較統語論研究、さらには言語習得の観点からも、多角的に検証を進めていきたい。

2) 語用論的要素の Phi 素性一致操作への関わり方に関する言語間変異

本研究では、提案した焦点卓越言語における Phi 素性一致に語用論的要素が関与するメカニズムの妥当性について、日本語の主語尊敬語化現象を、焦点卓越言語における CP 領域で生じる Phi 素性一致現象として分析することで立証した。また、この分析を日本語における重複可能形表現・重複命令形表現という新たな言語表現の分析に応用し、それらについても焦点卓越言語タイ

プの Phi 素性一致現象として分析可能であることを示した。さらに、尊敬語化現象の存在を手掛かりに、チベット語ラサ方言への本研究の応用可能性についても検討し、言語類型論的観点からもその妥当性を立証した。

3) 定形節のフェイズ性に関する言語間変異

本研究では、Miyagawa (2010, 2017)による Strong Uniformity と素性継承システムのパラメータ化の枠組みの下、共時的変異と通時的变化が同一視座で捉えられる可能性について立証してきたが、その帰結として主語卓越言語と焦点卓越言語間における定形節のフェイズ性に関するパラメータ化という言語の新たな見方がもたらされることを明らかにした。具体的に、当該理論的枠組みに基づいた場合、焦点卓越言語では定形節が必ずしもフェイズを形成しないと理論的に予測されることになる。焦点卓越言語に分類される日本語では、「超繰り上げ現象(Hyper-Raising)」の存在など、定形節が必ずしもフェイズを形成していないと示唆する事例がしばしば指摘されてきたが、定形節のフェイズ性に関するパラメータ化によって、定形節内からの繰り上げ操作の適用可能性に関する日英語間の相違性が適切に捉えられることを示した。

今後は、英語の構造変化を捉える通時的研究に応用し、本仮説の通時的観点からの妥当性の検証を進めていくことにしている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 三上 傑 | 4. 巻 38 |
| 2. 論文標題 英語のThere受動文が許容する語順パターンに関する通時的変遷と主語移動の適用可能性 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 JELS(日本英語学会大会プロシーディング) | 6. 最初と最後の頁 65-71 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 三上 傑 | 4. 巻 72 |
| 2. 論文標題 焦点卓越言語としての日本語と主語尊敬語化 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 日本英文学会東北支部第72回大会Proceedings | 6. 最初と最後の頁 153-154 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 三上 傑 | 4. 巻 95 |
| 2. 論文標題 英語の結果構文が示す「非能格性」：非能格動詞結果構文が許容する二つの解釈 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 英文学研究 | 6. 最初と最後の頁 53-71 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 三上 傑 |
| 2. 発表標題 英語のThere受動文が許容する語順パターンに関する通時的変遷と主語移動の適用可能性 |
| 3. 学会等名 日本英語学会第38回大会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名 三上 傑 |
| 2. 発表標題 語用論的要素の統語操作との関わり方とその言語間変異 |
| 3. 学会等名 日本英文学会東北支部第73回大会シンポジウム |
| 4. 発表年 2018年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|--------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 竹沢幸一他（編） | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 くろしお出版 | 5. 総ページ数 304 |
| 3. 書名 日本語統語論研究の広がり：記述と理論の往還 | |

| | |
|---------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 小川芳樹（編） | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 開拓社 | 5. 総ページ数 440 |
| 3. 書名 コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論2 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|